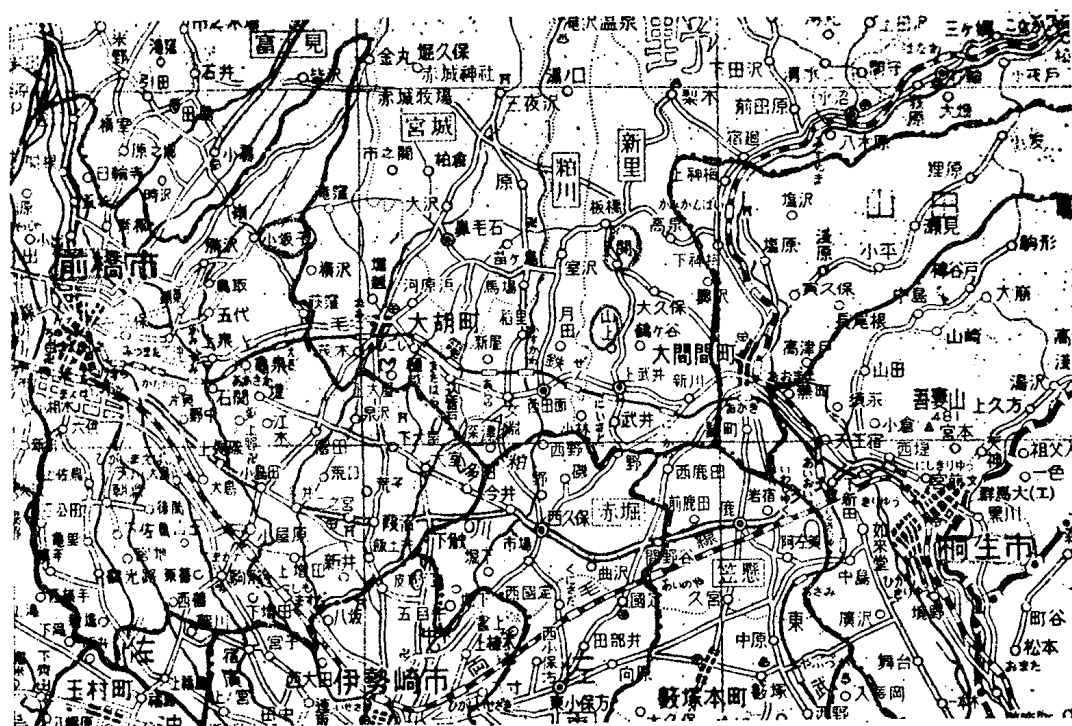


# 明治初年の農民経営

——上州関村「物産取調小前帳」その他の分析——

菅野則子



## は し が き

慶応末期から明治初年にかけての社会変動を世直し状況と総称すれば、その状況をもっともよく示している例の一つに、上州世直し騒動があることはすでに明らかなことである。しかしながら、その世直し騒動の起こった地域における農村構造なり農民経営なりの実態については、これまで二、三の指摘があるとはいえ、本格的な検討は今後のことにまかされている。

このことを念頭において、私たちは上州養蚕製糸地帯の史料調査を行ないつつあるが、その過程で数点の明治五一〇年の小前物産書き上げ帳を発見し、この史料の分析が、右の検討のためにもっとも相応しいものであると考えた。もとよりこれらの小前物産書き上げ帳は、府県物産表の資料として作成されたものであるが、少なくとも一村単位での各農民の経営を知るためには、明治初年にあつては、ほかにこれ以上の史料は求めがたいほどに重要なものであるといえよう。さらに、この史料の検討は、それによって、たんに世直し状況の基礎を知りうるということのみではなく、明治初年のわが国の経済的状况における蚕糸業の重要さと、その中で群馬県蚕糸業の地位とを考えれば、日本資本主義発達史研究の上での位置づけもおのづから明らかであろう。

それらの小前物産書き上げ帳の中で、こゝでは関村のそれを中心に紹介検討して行くことにする。関村を中心にするこの理由は、この村が右の世直し騒動の地域に含まれており、そこでの構造がかなり一般的様相を示していると思われることと、他村にくらべて比較的に関連史料が得られることとである。なお、本稿でとりあげる村々の物産概要を、関村をも含めて示しておこう。(表1)

表 1

	深 津 村	関 村	山 上 村		小坂子村
	(明治 5)	(年代不明)	(明治10) 高縄組	後閑組	(明治8年)
全 戸 数	108戸	25戸	42戸	53戸	84戸
米 生 産 量	石 945.864	石 110.795	石 174.64	石 226.06	石 404.6
a) 米生産戸数	105戸	19戸	42戸	47戸	84戸
a) $\frac{\quad}{\text{全戸数}}$	97.22%	76%	100%	87.04%	100%
1戸当平均	石 9.01	石 5.83	石 4.16	石 4.81	石 4.82
大麦生産量	石 361.251	石 97.67	石 106.3	石 156.8	石 223.2
b) 大麦生産戸数	107戸	25戸	25戸	40戸	75戸
b) $\frac{\quad}{\text{全戸数}}$	99.07%	100%	59.52%	75.47%	89.29%
1戸当平均	石 3.38	石 3.91	石 4.25	石 3.92	石 2.976
小麦生産量	石 96.7897	石 25.33	石 53.35	石 78.18	石 41.1
c) 小麦生産戸数	103戸	25戸	24戸	45戸	81戸
c) $\frac{\quad}{\text{全戸数}}$	95.37%	100%	57.14%	84.91%	96.43%
1戸当平均	石 0.94	石 1.01	石 2.22	石 1.74	石 0.51
生糸生産量	貫 匁 41.115	円 銭 83.50	貫 10.725	貫 19.025	貫 12.350
d) 生糸生産戸数	99戸	13戸	24戸	39戸	58戸
d) $\frac{\quad}{\text{全戸数}}$	91.67%	52%	57.14%	72.22%	69.05%
1戸当平均	貫 0.415	円 銭 6.62	貫 0.447	貫 0.488	貫 0.213
繭 生 産 量			貫 101.950	貫 116.650	
e) 繭生産戸数			22戸	40戸	
e) $\frac{\quad}{\text{全戸数}}$			52.38%	74.07%	
1戸当平均			貫 4.63	貫 2.916	
桑 生 産 量	13駄	81駄			50駄
f) 桑生産戸数	3戸	14戸			21戸
f) $\frac{\quad}{\text{全戸数}}$	2.78%	56%			25%
1戸当平均	駄 4.3	駄 5.79			駄 2.38

## 一、関村「物産取調小前帳」について

## (1) その内容

群馬県下民間営業の景況を挙げれば山間平坦地の別なく蚕業に従事せざるものなし、然れども之を細別すれば佐位、那波、緑野の三郡は養蚕を以て専業とするもの多く、東群馬、西群馬、片岡、多胡、南甘楽、北甘楽、碓氷、吾妻、利根、北勢多、南勢多、新田の十二郡は穀菽耕作と蚕業と相半す、邑楽、山田の二郡は穀菽栽培を以て専業とす……(中略)……

元来上毛の地たる固有物産中最も蚕系の業を以て一国の経済命脈を維持するが故に将来の目的も亦専ら此兩事業に在り……(下略)……

(明治十三年「興業意見書」)

このように南勢多郡は、明治一三年の調査によれば、穀菽耕作と蚕業とが相半ばするとされている。南勢多郡関村も、その概要においては、右の記載の例に洩れないことは表1より明らかである。そこで、こゝでの物産取調帳の内容を示すと表2のようになる。この史料の年代は明らかではないが、その記載内容、形式からみて明治五十七年の間のものとみてよいであろう。<sup>(1)</sup>なおこの史料の後文は以下のようなものである。

上野国勢多郡関村

稗 石 斗	玉蘭(売高) 錢 厘	生糸(売高) 円 錢	枝 束 錢	薪 束 錢	桑 駄 円 錢	芋菜大根	生 柿	炭
5.1	62.7	11.25	60-90					
4.0	65.2	10.00		束 錢 36-0.54				
					駄 円 錢 2-0.50			
					7-2.50			
0.22	34.2	5.50			3-2.25			
3.2	46.7	7.50		円 72-1.08		少 々		
					6-2.25			
					2-0.65	少 々		
					4-1.50		駄 円 錢 3-1.20	
	15.5	2.50				少 々		
3.0	75.0	12.00		50-0.75				
2.0	31.2	5.00						
2.0	15.5	6.75						
2.0	15.5	2.50			7-2.20			
2.5	43.7	7.50						
2.0	39.0	6.25						
3.0	50.0	8.00			8-3.00			
1.6	35.0	6.25			8-2.80			俵 円 400-25
					6-2.70			
0.8					8-2.70			
					6-1.50			
					6-1.70			
					8-2.50			
石 36.4	円 錢 厘 5.35.2	円 83.50	束 錢 60-90	束 円 158-2.37	駄 81-22.625		円 錢 1.20	円 25

表 2

## 「物産取調小前帳」

			米	大 麦	小 麦	大 豆	小 豆	粟
			石 斗	石 斗	石斗升	石 斗	石 斗	石 斗
小 池	栄次郎		8.2	8.5	3.15	1.2	0.5	1.1
小 池	徳 松	(餅米共ニ)	8.61	8.2	1.8	1.1	0.2	0.55
六本木	喜 作			0.45	0.3		0.1	0.2
須 永	伊 助		3.69	1.2	0.6	0.45	0.2	0.42
小野里	菊次郎		5.74	5.1	1.1	0.5	0.25	0.65
六本木	政五郎			0.5	0.55	0.2		
太 田	紋 恵	(餅米共ニ)	8.61	9.1	1.2	0.5	0.2	0.6
新 井	与重郎			4.5	0.9	0.65	0.15	0.6
六本木	菊 造			0.4	0.25	0.2	0.1	0.2
深 沢	芳五郎			1.0	0.45	0.15	0.12	0.3
今 泉	武 市		6.56	0.41	0.8	0.4	0.25	2.0
小野里	林 造	(餅米共ニ)	7.175	7.0	1.6	0.75	0.3	1.0
北 爪	藤 七		5.0	3.2	0.85	0.3	0.15	0.48
六本木	萬 吉		4.8	4.5	2.0	0.2	0.5	0.55
岩 崎	久 助		6.1	3.5	0.45	0.45	0.25	0.62
岩 崎	与 七		7.5	5.0	1.4	0.7	0.25	0.4
小野里	真須美		5.2	4.0	1.5	0.5	0.2	0.3
岩 崎	清 吉		7.8	7.5	1.6	0.8	0.4	0.65
岩 崎	久 造		8.2	8.5	1.8	0.9	0.45	0.65
三谷山	竜興寺		7.35	2.0	0.6	0.35	0.25	
北 爪	米三郎			0.52	0.3	0.15	0.082	0.1
山 道	磯 次		2.9	2.5	0.8	0.45	0.15	0.25
六本木	嘉 吉		1.6	1.5	0.48	0.15	0.15	0.2
六本木	要三郎		2.46	2.4	0.65	0.32	0.15	0.6
六本木	平 八		3.3	2.5	0.25	0.2	0.45	
合			石 110.795	石 97.67	石 25.33	石 11.66	石 5.612	石 10.9

「右者一人別惣不残取調書面之通り相違無御座候

群馬県御庁

惣代	岩崎	清吉	印
同	小野里	真須美	印
組頭	太田	紋恵	印
副戸長	小池	栄次郎	印

ところで、これらの史料には、その処理の過程で注意しなければならないところがある。それは、例えば養蚕、製糸業の場合、かりにある農民が桑二〇〇貫目を生産し、それによって養蚕を行ない繭一石を生産し、さらにその繭一石を原料として生糸一貫目を生産した場合、これらの物産調には、生糸一貫目のみが記されるか、桑・繭もそれぞれ記載されるかという問題である。関村の場合には、右の例によれば、生糸の部分しか記されていないと考えてよい。それは、この物産調には繭の記載はないが、玉繭が記されていること、さらに養蚕に結びつかない桑が換金されているという事実<sup>(3)</sup>によっている。たとえば、表中、岩崎久助の場合、そこに示されている桑七駄は、彼の生糸生産にとっては余剰の桑であってそれが販売されたものと考えてよい。

(2) 土地保有関係との関連

右の物産調に関連する史料を若干示しておこう。

表3・4は嘉永五年および明治五年の「田畑名寄帳」を整理したものである。これから注意しなければならないのは、個々の土地保有規模は零細であるが、多くの入作農民がいること、および嘉永から明治にかけて関村の戸数が激減していることの二つである。

表3

	田畑合	戸 数		反 別		注
		村 内	村 外	村 内	村 外	
嘉永5	町 35.3019	43戸	25戸	町 30.6622	町 4.2903	反別は田畑合と一致しないが、とりあえず史料に記載されている通りにしておく。
明治5	町 35.3019	29戸	24戸	29.1611	4.1629	

表4

	嘉 永 5		明 治 5	
	村 内	村 外	村 内	村 外
反				
20	4		5	
15	3		4	
10	4		3	
9				
8	2		2	
7	2		2	
6	2		1	
5	2	1	2	2
4	1	2	1	2
3	4	1	2	1
2	3	3	3	1
1反以上	12	8	1	6
1反未満	4	10	3	12
土地保有規模(反)	43戸	25戸	29戸	24戸
戸数				

表5

	集積分		合 計
	反	反	反
直右衛門	1.516	与十郎へ 1.210	1.516 2.726
金 藏	3.102	紋 恵へ 10.919	3.102 14.021
銀 藏	1.925	元次郎へ 5.606	1.825 7.501
金 太 郎	1.416	金太郎 1.416	1.416
友 次 郎	3.316	友次郎 3.316	3.316
与 兵 衛	4.825	徳 松へ 19.117	4.825 24.208
徳 兵 衛	0.126	" 0.126	0.126
団 藏	3.101	伊 八へ 6.926	3.101 10.003
武 助	1.415	菊次郎へ 14.428	1.415 16.213
		藤吉分 0.300	0.300
卯 兵 衛	1.724	真須三へ 15.022	1.724 16.816
三左衛門	1.614	清 吉へ 23.828	1.614 25.512
捨 五 郎	1.020	捨五郎 8.107	
萬 藏	1.109	武 市へ 7.603	1.109 8.712
繁 松	2.010	勝 弥 2.010	
権 七	0.302	儀 八 0.302	
「潰屋敷反歩巨細書出帳」に書き上げられている農民とその保有規模		「田畑名寄帳」に記されている土地集積者とその集積規模	



表 6

桑(駄) 米(石)	0	1	2	3	4	5	6	7	8
8	3								1
7	2					(C)	1		1
6	1							1	
5	3								
4	1								
3	(A)					(B)		1	1
2							1		1
1							1		
0	1		2	1	1		1		

生 糸 (円)	0	1	2	3	4	5	6	7	8
12	1								
11	1								
10	1								
9									
8									(F) 1
7	2	(D)							
6	2								1
5	2								
4									
3									
2	1								1
0	1		2	1	1	(E)	4	1	2

とくに後者のてんについて、表 4 と明治四年「潰屋敷反歩巨細書出帳」との関係を見るために表 5 を作成した。と  
りあえず、史料から明らかに潰百姓として捉えられる一〇人の保有規模をみると、四反八畝のもの一、三反余のもの  
二、二反以下のもの六、一反未満のもの一であって、表 4 に示された四反以下層、就中二反以下層の減少がその内容  
である。さらに表 5 に示したように潰百姓の所持地を集積したものは、その結果として、それぞれ二町五反以上一、  
二町以上一、一町五反以上二、一町以上二、七反以上三、二反以上一となっている。以上から、この時期における農  
民層分解の様相の一端を知ることができる。

## (3) その 整 理

以上(2)で示された事実をふまえ、(1)の「物産取調小前帳」を整理することにする。  
まず、米を中心に生糸生産と桑生産との関係を見て行きたい。表6は、米生産と桑生産との関係を示したものであるが、これから村内の農民を以下のように区分できる。

- (A) 米生産四石以上層で、全く桑販売を行なわないもの
- (B) 米生産四石以下層で、一定規模で桑販売を行なっているもの
- (C) 米生産六石以上、販売桑六駄以上のもの

となる。また同表より、桑販売と生糸生産との関係から

- (D) 桑販売が零で、生糸生産を行なっているもの
  - (E) 桑販売を一定規模で行なっているが、生糸生産を行っていないもの
  - (F) 桑販売・生糸生産の双方を行なっているもの
- となり、(D)は(A)に合致、(E)の殆どは(B)に、(F)は(C)に合致する。

このことから、米生産量四石以下層はもっぱら桑の販売者であったといえる。これにたいし、(A)・(C)は生糸生産を行なっており、更に(C)の四人について、明治五年段階での土地保有規模をみると、史料照合ができない一人を除いて、残る三人はいずれも保有規模二町以上のものたちである。恐らく、必要な主穀、雑穀生産の上に、なお相当程度の桑生産を行っていたのであろう。こうして当村の桑販売は、主として米生産四石以下層と土地保有規模二町以上層の農民たちによって支えられていたといえる。また、米生産四石以上層のうち、(A)に属する農民は、四石以下層の生産桑によって養蚕、製糸を行なう層であったといえる。

前述の分析からこの地域を養蚕、製糸地帯として位置づけることができるが、その内容は、村内において桑生産に終始する階層と、養蚕、製糸を一貫させて行なう階層とが存したこと、これは換言すれば、桑生産と養蚕、製糸との分離が行なわれつつあったことを示すものであろう。

(4) 小 括

(2)よりみると、この村における農民層分解は、土地保有規模二反以下というごく下層の農民が土地を手ばなし、脱農化の傾向を辿って行くが、他方でその土地を集積するものが特定の階層のものであったといふことはできない。それは、自作的規模の農民経営を強化して行くような分解のあり方を示すものであったといえるのではないだろうか。とすると、(3)でみたこととの関連で考えれば、没落して行く農民階層は、その経営において製糸業と結びつかない桑生産農民であったということができよう。また、この地にあつては、製糸業は、とくに米生産と不可分の結びつきをしていたということもほゞ明らかである。

そこで、以上関村について述べてきたことは、表1に示されるような条件のちがつた村において、どのようにあらわれているかということを、若干の例を通じてみてみよう。

二、深津・山上村の「物産取調帳」

(1) 深津 村

表1によると、ほかの村との比較において雑穀生産、生糸生産は中位であるが、米生産においては、米生産量が村全体でも生産戸数当でも大きいのが深津村である。そこでまず、深津村の「物産取調小前帳」についてみることにする。

表 7

85俵以上	1
80-	1
75-	
70-	
65-	1
60-	
55-	1
50-	2
45-	
40-	7
35-	6
30-	11
25-	9
20-	11
15-	17
10-	17
5俵以上	14
5俵未満	6
0	3
米(俵)	
戸	108

表 8

米(俵) 生糸(匁)	0	100匁 未満	100匁 以上	200	300	400	500	600	700	800	900	1000	1100	1200	1300
85俵以上											1				
80												1			
75															
70															
65										1					
60															
55															1
50								1	1						
45	(a)		(b)												
40	1		1				1	2	1		1				
35		2					2	1		1					
30		1	1				2	5	1		1				
25				2	2			4		1					
20		1		3	5	2			1						
15	1	1	4	3	5	2	1								
10	4	2	4	2	2		1		(c) 2						
5	1	3	6	2	1	1	1								
5未満		3	2	1											
0	2								1						

こゝでも、生糸の記載があるにもかゝらず玉繭以外の繭についての記載が全くない。しかし、玉繭がかなり広範に販売されているのであるから、各経営で生産された繭はその経営内での生糸生産の原料として消費されたものと見做すことができる。また、桑については「売上」として換金されているのは村内で一三駄のみである。これ以外の桑についても繭と同様、それぞれの経営内で費消されたのであろう。このことを裏づけるものに、明治九年の「総計帳」がある。そこには穀類、生糸等と並んで「桑八四〇駄 直段無之」という記載がある。村内で八四〇駄の桑が生産されるが、それは桑そのものとして販売換金されることがなかったことを示すのであろう。このように、深津村においては、桑―繭―生糸の生産が個々の経営でそれぞれ一貫して行なわれていたのが一般的であったといえる。

各個人の米取入高を示した表7によると、米取入高五〇俵以上のものはわずか六戸（五・五六％）であり、殆どの農民は四〇俵以下に集中、就中、二〇俵以下のものは五七戸（五二・七八％）にのぼり、村内における農民層の分解はかなり進んでいたといえる。

次に、米生産と生糸生産との関係を示した表8によると、両生産の相関関係は、一部の例外を除いては高い。例外部分とは表中の(a)・(b)・(c)に含まれるものである。(a)は、恐らくは養蚕、製糸には全く関係をもたなかったものであろう。(b)は、極く小規模の製糸を営むものたちであり、(c)は養蚕、製糸を経営の中心におくものたちである。

関村に比べて当村では、米生産を基軸に階層分化が進んでいたことは確かである。その間にあって生糸生産の展開が、右の米生産を基軸とした分解を大きく変容させているとはいえない。従って、上層農民についてみれば、米取入高の大きいもの（それは恐らく小作関係を伴った地主であろう）は、同時に生糸生産においても大であって、それは恐らく豪農であるといつてよいであろう。ところで、この状態は、この直後の養蚕業の急速な展開によって大きく変わって行くようにみられる。それは表9に明らかのように、繭生産が急増して行くにもかゝらず、生糸生産の趨勢は停滞的であって、そのことは、この村が製糸業を伴わない養蚕地帯に変貌して行くことを意味している。そしてそのことはまた、明治八、九年に至って、この地域の養蚕、製糸業を中心とした分業関係が大きく展開したことのあらわれでもある。



(2) 山上村

物産の内容において深津村と対照的な様相を示すのが山上村である。この村については高縄組、後閑組の二組の明治一〇年「物産取調帳」がある。これらによると、組の間に多少、性格のちがいがみられるので、個々の組について別々にとりあげてみて行きたい。しかし、山上村の「物産取調帳」は共通して関村や深津村とは異なる。それは、ある農民が自家製繭で製糸を行なった場合、「物産取調帳」のその農民の物産には生糸とともに繭も記されていることである。<sup>①</sup>

(イ) 高縄組

この組の物産調に書き上げられている米生産量と、明治一三年の史料中に記されている土地保有規模とから表10を作成した。但しこれは、一〇年から一三年の間に多少の移動があったものと思われ、全戸数四二戸のうち、三戸については照合できなかった。これによると米生産からみても、保有規模からみても分解度は低位であるといえよう。

このような組の農民たちが、生糸生産および繭生産にどのように関わっていたのか。表11によると、双方の生産に全くかゝりわりをもたない四戸を除くと(a)・(b)・(c)の

表11

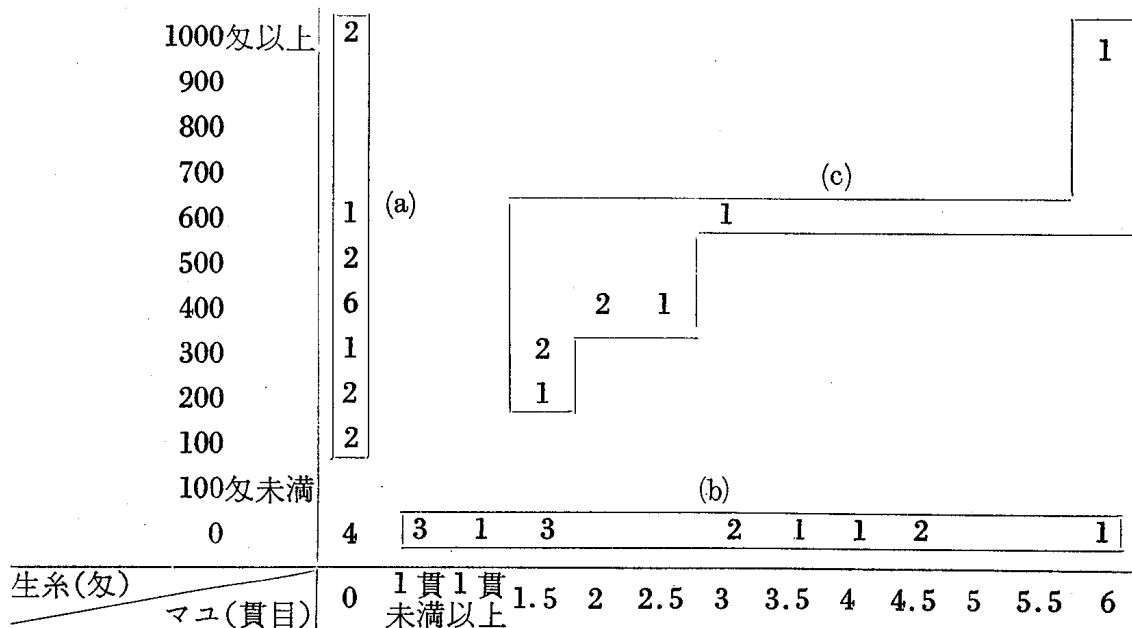






表13

20	1
15	
10	1
9	
8	1
7	
6	1
5	3
4	7
3	7
2	12
1石以上	7
1石未満	7
0	6
米(石)	53戸
	戸 明治10年後閑組

表15

農民番号	米生産量
No.	石
11	1.2
26	1.4
27	2.0
29	1.2
34	0.52
43	2.9
45	0
49	0
50	0
51	0
52	0
53	0

表14

1500											1	1*	
1000													
900										1			
800											1		
700													
600							1	4					
500							5					1	
400					1								
300				3	2	1					1		
200			2	9									
100		2	3										
100未満													
0	12		1										
生糸(匁)	0	1貫目未満	1貫目以上	1.5	2	2.5	3	3.5	4	4.5	5	5.5	6
繭(貫目)													

\* は浅田長太郎

貫

繭 21.200

生糸 3,690 目

各農民群に区分できる。これらがそれぞれ米生産とどのように関わっていたかをみようとしたのが表12である。これによると表11の(a)にあたるものが表12の①、(b)にあたるのが②、(c)にあたるのが③であるが、この三つの群はいずれも米生産を基軸とした階層としてはとらえることはできない。

## (四) 後 閑 組

表13から、米生産一石未満のものが一三戸、就中、零のものが六戸あるのにたいし、一〇石以上のものが二戸、とりわけ二四石余のものが一戸あり、高縄組に比し、農民間に分化の中がみられることを指摘でき、さらに表14をみると高縄組とはその傾向が大きく異なっているのがわかる。すなわち、養蚕・製糸に全く関係していない一二戸を別とすれば、ごく一部の農民を除いて殆どの農民が一直線上に並ぶ。これらの農民は、個々の経営内で一貫して養蚕・製糸を行っていたものといつてよからう。それらの中で特に注目されるのは、ひとつには、浅田長太郎という、米生産二四石余、繭生産二一貫目余、生糸生産三六九〇匁と他に抜きん出た生産を行っているものがあるといふことである。彼の明治一〇年当時の土地保有規模についてはわからないが、彼も恐らくは豪農的な存在であつたのであろう。ふたつには、これの対極に脱農化の傾向をもつと思われるところの、表14において、生糸・繭の両生産に全くかゝわりあがないとみられる一二戸の農民がいるということである。彼等の経営内容を示した表15から、彼等の多くは米生産も小さく、殆どが二石以下のものたちであることがわかる。

## (五) 小 括

以上の山上村高縄・後閑両組の様相をみると、そのおかれている生産条件ではほとんど同じでありながら、農民諸階層のあり方には大きなちがひがある。そのちがひは、前述の明治八年前後からの変動と深くかゝわっているであろうと思われる。それは恐らく、それぞれの組の分業関係へのかゝわりあひ方のちがひではなからうか。両組においては、すでに米・雑穀生産と生糸・繭生産とは一定の照応関係を示さなくなっているのでは共通している。それは養蚕・製糸業を通じて農民たちが再編されて行く過程にあるということを示しているものといえる。その間にあって、後閑

組では、前述の長太郎のような豪農を中心とした編成が進められて行ったのであろう。他方、高縄組では、未だ組内における分業関係の展開にとどまっているのであるが、その発展の方向は後閑組にみられる様相であらう。

### 三、まとめ

明治五〇一〇年の物産調をもって世直し騒動の基礎をさぐろうとすることにはもとより問題がありうるのであるが、はしがきで述べたような事情によって、以上のような検討を行なってきた。

明治五〇七年の閑村と深津村とを比較した場合、米作比重の小さい閑村においては、養蚕・製糸業の展開は、下層農民の潰百姓化をもたらしている。実際、幕末期における二反以下の下層農民の無保有農民化は著しく、明治五〇七年段階になっても、米取入高四石以下層は没落の過程にあるといつてよい。これらの農民は恐らく、この地帯における半プロ農民の主要部分を構成するものであろう。他方、一町一二町五反を保有する上層農民は、養蚕・製糸をその経営内にとりくみながら、幕末一明治にかけて比較的安定した経営を維持していたのであり、やがて彼等は豪農形成の母体となるであろう。その発展の方向を後閑組の様相にみることにそれほど無理がないと思われる。こうして閑村においては、世直し騒動の基礎は半プロと一般農民（製糸農民）、とりわけ上層農民との間の矛盾としてあったといえよう。これにたいし、深津村においては、米作比重の大きさに基礎づけられて地主的農民が形成しており、養蚕・製糸業の展開に伴って、その地主農民が豪農化したものといえよう。その過程にあつては、下層農民は下層保有農民として、実際には小作農あるいは賃引農民として、村の中に定着せしめられていたのである。従って、世直し騒動の基礎は、まず、それら下層農民・半プロと豪農との間の矛盾として激化したのであろう。

なお、右の閑村の様相が特殊事例でないことは、明治八年小坂子村「物産取調帳」が示しているのであって、その内容を以下紹介して本稿を終る。

小坂子村の明治八年「物産取調帳」によると、この村は八四戸から構成されており、米・麦・大豆などの主穀雑穀生産のほか桑・生糸生産が広範に行なわれている。表16は、史料中の「現米」部分を縦軸に、全生産物の合計金

表16

	8	10	12	17	19	8	6	2	1	1	84戸
12石以上										1	1
11											
10											
9								2	1		3
8							5				5
7					1	2	1				4
6				1	11	6					18
5				4	4						8
4			2	11	3						16
3		1	9	1							11
2		7	1								8
1石以上	6	2									8
1石未満	2										2
現米(石)	10円未満	10円以上	20	30	40	50	60	70	80	90	100
総収益(円)											

表17

100%	1戸
90	3
80	12
70	34
60	29
50%以上	5
50%未満	0
全生産物中に占める 米の比率(%)	84戸
戸	

額を横軸にとり、両者の関係および村内の階層構成をみようとしたものである。これによると、一二石以上の一戸を除けば全で一〇石未満であり、とりわけ七石未満三石以上のいわば中層農として位置づけられるものが五三戸、全体の六〇%余を占めており、関村と同様にこの層が厚いことが指摘される。また、米生産量と各農民経営内で生産される生産物の合計金額との相関関係がかなり高いことが表からよみとれるが、さらに個々の農民の経営にとって、米生産がどの程度の比重のものであったのかを知るために表17を作成した。これは個々の農民について全生産物の金額を合計し、その中に占める米生産量の比率をみようとしたものである。これによると八四戸全部が、その経営規模の五〇%以上を米生産に占めていることがわかる。さらにその内容をみると、現米八石以上のもの(A)、三石未満層(B)、七石以下三石以上層(C)に区分され、各経営内における米生産の占める比率は(A)は五〇~七五%、(B)は六五~一〇〇%、(C)は五〇~九〇%の間に散在している。以上から、八石以上層は米生産をその経営の中心におきながらも、それ以外の生産を一定程度の大ききで兼ね行なっていたこと、また三石未満層は、その経営の殆どを米生産に委ねざるをえないものたちであり、七石以下三石以上層は、当村においては中層に位置し——またこの層が当村内において大きな部分を占めている——ながらも、主穀・雑穀生産のみでは再生産を維持することができず、従って、それを補完するための諸生産を獲得せざるをえなかった層であるといえよう。

次に桑生産および生糸生産についてみてみよう。こゝでも物産調には繭は一切記載されていないが、これは先きに関村で検討したことと同じ事情によるものといえよう。また、桑生産↓繭・生糸生産への関連については注(7)で記した理解に立って、それぞれ各自の生産量の全てを書き上げたものとしてよい。そうすると、全戸数八四戸中、桑生産をしているもの二一戸、生糸生産を行なうもの五八戸であるが、桑・生糸の両生産を兼ねているものはなく、両生産いずれをも行なっていないものが五戸となっている。そこで、桑生産を行なうものと、生糸生産を行なうものとの間のちがいをみようとしたのが表18である。これによると、生糸生産を行なっているものの殆どが、米生産三石以上であり、三石未満層ではわずかに二戸で全体の三%余を占めるにすぎない。他方、桑生産を行なうものの多くは三石未満層であり、一四戸、桑生産戸数の六七%を占めている。



以上から、当村においても関村における状況と同じく桑生産と繭・生糸生産とを担う主体には階層的なちがいがあ  
るのではないかと考えられる。

## 註

(1) あとで検討する深津村の「物産取調小前帳」が明治五年であり、山上村の「物産取調帳」が明治一〇年であるが、小坂子村の明治八年「物産取調帳」が繭、生糸の記載方法において山上村と同様であるところからみると、明治五／＼八年の間に「物産取調帳」の調査方法についての制度的変更があったものと考えられる。そして関村の「物産取調小前帳」は深津村のそれと同方法によるものであるところからみると、その年代は本文の如くなるう。

(2) 玉繭とは二匹の蚕が共同でつくりあげたもので、糸口が二つあるため製糸過程では不要のものとされた。糸を引くことのできない玉繭は真綿などに加工する以外に用途はなく、製糸過程で出現する大量の玉繭はそのような意味で販売に供された。従って、玉繭が広範に出現していることは、繭が背後に存在していることを意味している。また、念のために付言すれば、養蚕技術に特別に稚拙の差がない限りは、生糸生産のために用いられた繭と玉繭の出現量とはほぼ比例するものとみてよい。表aを参照されたい。

(3) 表2からもわかるように玉繭以下の諸生産物については「売高」と記されているように、諸生産物の中で販売されたものの金額が記載されている。従って、桑について言えば、生糸生産に結びつく部分については記されず、結びつかずに桑のまゝ販売される部分がこの書き上げに記載されているものとみておこう。

(4) 「潰屋敷反歩巨細書出帳」の史料の末尾に「一、家数合一四軒、反歩合二町九反一三步、門反別一町三反三畝一二歩、同家数合九軒」と記されているが、実際に書き上げられているのは一五軒、反歩合二町九反一一步となっている。反歩合の差は誤差とみて

表 a

70-										1	
65-											
60-											1
55-											
50-											
45-											
40-									1		
35-											
30-							1		1		
25-				1		1					
20-						2					
15-				2							
10-		1		1	1						
5升以上		1	1								
5升未満		3									
玉まゆ売上高 (升)	0	100	200	300	400	500	600	700	800	900	1000
生糸売上高 (匁)											

明治5年「物産取調小前帳」(勢多郡深津村扣)より作成



よからうが家数の差はどこに起因するのか。また「門反別……合九軒」の部分は何を意味するのであろうか。明治五年の「田畑名寄帳」と照合してみた表5によると、一五軒のうち、一〇軒については、明らかに「潰」と捉えることができ、また彼等の土地が誰に集積されるのかまで確認できるが、残る五軒については、三軒（表中金太郎・友次郎・捨五郎）は五年の「田畑名寄帳」にみることができ、二軒（表中繁松・権七）は不明である（尤も、同規模のものが二軒あり、代が変わったと解することもできるので、とりあえずそのものを表中に記しておく）。

(5) 本町組の「物産取調帳」も見出せたが、史料不備であったため、分析の対象外においた。

(6) 明治一三年「出勤日扣帳」の中の「銘々平反割之部」という箇所、高縄組の農民たちの反別が記されていたので、これによる。

(7) この村の「取調帳」は他村のそれとは多少異なっている。即ち、書き上げられている全生産物をすべて代金に換算してあることである。この各生産物に付された金額は、全体からみてそれらの売上代金とみることとはできない。従って、ここでは個々人の諸生産物の量を貨幣に一率に換算してあるものとして以下分析を進めたい。なお、生糸等を商品として売る場合は、ここに書き上げられた諸生産物の中に含まれるものと考えられる。

#### 附 記

関村の史料は、一九七一年七月、東京女子大学史学科二、三年生の合同調査の際採訪したものである。

なお、関村の史料は岩崎家、深津村のそれは粕川村深津区有、山上村のは角田家、小坂子村のは小林家のそれぞれの所蔵文書の一部である。